

# 障害者競技 ファン増やせ

## 20年パラリンピック見据え



車椅子バスケットボールの体験会（5月、東京都渋谷区）＝日本車椅子バスケットボール連盟提供

2020年の東京パラリンピックに向け、障害者スポーツファンを増やす取り組みが広がっている。一般の人にルールや魅力を知ってもらおうと、競技団体などが体験会や競技の見どころを伝える講座を企画。20年大会開催を支える人材を増やそうと懸命だ。関係者は「6年後の大会は競技場を満員の観客で埋め尽くしたい」と張り切る。

## 体験・講座「醍醐味知って」

「ナイスシュートン」。「惜しい。もう一回」。5月中旬、都内の体育館に若者の歓声が響いた。決勝戦当日に開かれた。日本車椅子バスケットボール連盟（東京）が開いた体験会。小学生や学生ら約60人が車椅子バスケット選手とのミニゲームに挑戦。競技用車椅子の扱いに戸惑いながらも競技の面白さを味わった。

第1回大会が開かれたパラリンピック。08年の北京大会から五輪と同じ組織委員会が運営することになり、注目度も高まった。発祥の地とされる英国で開かれた12年ロンドン大会では史上最高270万枚のチケットが完売した。だが、海外に比べて国内では関心が低いのが現状だ。昨年9月、都内で開かれた国体の開会式には約2万4千人の観客が集まったが、2週間後に同じ会場で開かれた全国障害者スポーツ大会開会式は約4千人にとどまった。ルールや競技レベルの高さが知られていないことが背景にあり、20年東京五輪・パラリンピック組織委員会の担当者は「世界が注目する中、会場がガラガラというわけにはいかない」と懸念する。

国内のパラリンピック競技の環境は厳しい。日本パラリンピック委員会（JPC）によると、スポンサー企業数は五輪の30分の1程度。多くの選手が遠征費など年間数十万円から100万円程度を自己負担しているのが現状だ。政府は支援を強化するため今年度、障害者スポーツの所管の一部を厚生労働省から文部科学省に移管。「リハビリテーションの一環」

## 「福祉」から「スポーツ」へ 国の支援、競技力にも目

2014年度の選手強化費は前年度より約2億円多い約9億円に増額。強化のための調査研究費も新たに予算計上された。JPC担当者は「国の施策の位置付けがようやく福祉から競技に変わった。東京大会では世界5位のメダル数を目指す」と話している。

こうした中、競技団体の支援団体はファン拡大に取り組み。視覚障害者のサッカー競技団体「日本ブラインドサッカー協会」（東京）は初心者向け決めた後は観客も大歓声

表理事の伊藤数子さん（52）は「20年大会の成功には効果的な応援で選手の好プレーを引き出し、外国人の障害者を適切な介助でもてなせる市民が欠かせない。企画を通して競技の醍醐味や障害のことを学んでほしい」と呼びかけている。

夏季パラリンピックの歩み

年	開催地	参加国・地域	競技者数	
1960年	ローマ	23	400	第1回パラリンピック
64年	東京	21	375	開会式に約5000人の観客
88年	ソウル	61	3057	パラリンピックが正式名称に
2008年	北京	146	3951	五輪と同一の組織委員会が運営
12年	ロンドン	164	4237	ボランティア7万人が活躍
20年	東京	?	?	

（注）国際パラリンピック委員会まとめ